

## 準奨励品種

水稻（うるち）「コガネヒカリ」

（農試県南分場）

### 1 来歴

「コガネヒカリ」は、昭和49年4月に、宮城県古川農業試験場において、中生の強稈良質耐病品種の育成を目標として、良食味系統である「愛知26号」（のちの「初星」）を母とし、良質強稈耐病系統である「奥羽295号」を父として人工交配が行われ、その後代から育成された系統である。

昭和52年「古2839」として生産力検定試験、特性検定試験ならびに系統適応性検定試験に供試し、昭和53年「東北125号」の系統名で各県に配布された。

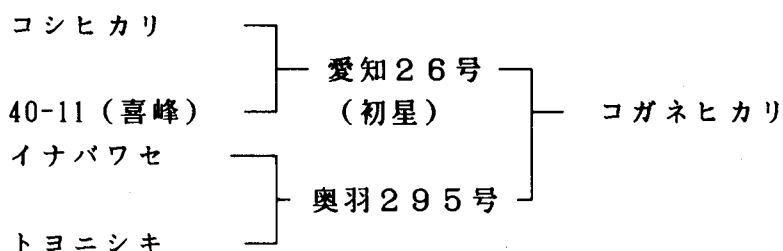
岩手県においては、昭和53年から県南分場で生産力検定予備調査に供試し、昭和55年から生産力検定調査並びに現地調査に供試して、収量及び特性を検討した結果有望と認められ、昭和56年度に奨励品種に採用となった。

奨励品種に採用後、順次作付けが拡大し、昭和61年には作付け面積20,400ha、作付け割合25.0%と「ササニシキ」に次ぐ普及面積となった。

しかし「ササニシキ」等の良食味品種に比較して、やや食味が劣ること、年次により未熟粒の発生や着色粒の発生が見られ、品質的にも難点があったことから、昭和61年をピークとして作付けが減少し平成2年度には3,500haの普及面積となった。また、「コガネヒカリ」と同一の熟期及び収量性で、より食味並びに品質の良い「チヨホナミ」が平成元年度に奨励品種に採用されたことから、平成2年度に奨励品種から削除された。

奨励品種から削除された後も、栽培しやすい性質を持っていることから、作付けが継続されており、平成5年度における作付面積は500ha余りである。

また平成5年度には、農林水産省より岩手県における他用途利用米の多収穫品種として指定され、その生産が求められているとともに、奨励品種に編入する必要が生じている。



### 2 特性の概要

#### (1) 形態的特性

- (ア) 移植時の苗の草丈は「トヨニシキ」並で葉色は濃く葉身のたれが少ない。
- (イ) 最高分けつ期の草丈は「トヨニシキ」よりやや長く、茎数の確保も容易である。穂首分化期以降葉色は淡緑となり草姿良好となるが、出穂後は止葉はやや大きく開く。
- (ウ) 成熟期の稈長は「トヨニシキ」より5cm~6cm程度短く、穂長は「トヨニシキ」並、穂数は「トヨニシキ」より多いやや短稈の中間型品種である。
- (エ) 粳の粒着はやや疎着で、2次枝梗の着粒が少なく、出穂後の登熟速度は「トヨニシキ」並、登熟歩合は「ササニシキ」よりまさるが、「トヨニシキ」よりやや劣る。
- (オ) 少程度の短芒を有し、ふ先色は黄色である。
- (カ) 玄米の粒形は中円で千粒重は「トヨニシキ」より0.7g~1.3g程度重く、光沢・色沢は良好であるが、登熟期の気象不良年次では「トヨニシキ」より腹白が目立ち未熟粒が出易い。平常年では「トヨニシキ」、「ササニシキ」並の品質である。
- (キ) 搗精歩合は「ササニシキ」並で、搗精時間は「トヨニシキ」より短く、胚芽の残存も少ない。

(ク) 食味の評価は「ササニシキ」に及ばないが、「トヨニシキ」「キヨニシキ」よりもすぐれている。

(ケ) 収量性は標肥、多肥条件ともに「トヨニシキ」「ササニシキ」より多収である。

## (2) 生態的特性

(ア) 出穂は「トヨニシキ」並であるが、成熟期は「トヨニシキ」よりやや早い、晩生の早である。

(イ) 強稈で倒伏抵抗性は「トヨニシキ」並か、ややまさる強である。

(ウ) いもち病真性抵抗性遺伝子はP i - aと推定され耐病性は葉いもち病強、穂いもち病やや強であり「トヨニシキ」よりやや劣るが、「キヨニシキ」よりは強い。

(エ) 耐冷性は「ササニシキ」「トヨニシキ」より不稔の発生は少なく、「ササニシキ」「トヨニシキ」よりは強い、やや強である。

(オ) 低温登熟性は、「トヨニシキ」より劣るが、「ササニシキ」よりまさるものと思われる。

## 3 準奨励品種に採用する理由

近年、良食味米指向及び自主流通米指向の流れの中で、本県の中南部平坦地・中南部沿岸地帯では、「ササニシキ」等の良食味品種にのみ作付が偏り、政府米及び他用途利用米の集荷に支障を来す事態が発生している。

現在当該地帯では自主流通扱い以外の品種として「チヨホナミ」があるが、食味、収量性、耐倒伏性には問題が無いものの、いもち病に弱く作付が伸びていない。そのため食味はやや下がっても多収性で、栽培しやすく、低コスト生産の可能な品種が求められている。

この様な情勢の中で、「コガネヒカリ」は、平成5年度に、農林水産省より岩手県における他用途利用米の多収穫品種として指定され、その生産が求められているとともに、奨励品種に編入する必要が生じている。

食味は良食味品種にはやや及ばないものの、多収性、耐倒伏性、耐病性を合わせ持つ「コガネヒカリ」を再評価し、安定・多収品種として準奨励品種に採用することにより本県中南部平坦地・中南部沿岸地帯の品種構成の適正化を図る。

## 4 適応地域

北上川中下流地帯（紫波以南）、東南部の平坦地及び南部沿岸地帯（釜石以南）の標高100m～150m地帯。

## 5 栽培上の留意点

(ア) いもち耐病性は「ササニシキ」よりまさるが、「トヨニシキ」より劣ることから、いもち病及び紋枯病の防除は基準にしたがって適期防除に努めること。

(イ) 登熟期の気象不良年次には、乳白、腹白等の未熟粒の発生が多くなるので、追肥量は控え目とし適期刈取りに努めること。

(ウ) 基肥量は「トヨニシキ」並とし、生育量を十分に確保する。「コガネヒカリ」は特に地力の高い水田で、その特性が発揮されるので、深耕と地力増強により後期栄養の維持確保に努める。

ただし、倒伏した場合挫折型の倒伏となるため、極端な多肥栽培はさける。

(エ) 追肥は幼穂形成期に窒素成分量で0.2kg/a程度の1回施用を基本とするが、生育量が不足したり、極端に葉色が低下した場合には、「つなぎ肥」や減数分裂期追肥を併用する。

(オ) 「コガネヒカリ」の刈取り適期幅は1,000℃～1,150℃で、1,200℃を超えると玄米の光沢・色沢が劣り、また茶米の発生が多くなり品質低下を招くので刈取り時期に注意する。